

存在論的恐怖への対処方略における選択的反応

—オーストラリア人データを用いた検証—

○戸谷彰宏・中島健一郎

(広島大学大学院教育学研究科)

問題

Terror Management Theory (TMT; Pyszczynski et al., 2015) によれば、人は死の運命に対する恐怖(存在論的恐怖)を制御するために複数の死の不安緩衝装置を持つ。主に指摘されているものは①文化的世界観(集団内の人々に共有されている現実についての信念; Solomon et al., 2004), ②自尊心(文化的世界観の規範に従い、自身が有意味な世界の価値ある成員であるという感覚; Pyszczynski et al., 2015), ③親密な他者との関係性である。死の意識を高める操作(MS操作)で、これらの機能を求めることが示されている(Pyszczynski et al., 2015)。また高齢者では④世代継承の重要性も挙げられる(Maxfield et al., 2014)。

先行研究では、MS操作後に単一の不安緩衝装置を扱い、それらへの接近—非接近の視点から検討している。しかし、現実場面では様々な死の不安緩衝装置の中で、個人にとって最も重要であるものを選択できるはずである。死の不安緩衝装置の相対的な用いられやすさを検討することで、現実への応用(e.g., 行動予測)に役立つ知見を提供できるだろう。そこで、死の不安緩衝装置の相対的な用いられやすさを検討することとした。

死の不安緩衝装置の求めやすさを決定しうる要因としては、年齢世代と愛着スタイルが考えられる。大学生においては文化的世界観の防衛反応が見られるが、高齢者では行われず(Maxfield et al., 2007)、世代継承性が高まることが示されている(Maxfield et al., 2014)。また大学生を対象とした研究により、2次元からなる愛着スタイル(愛着不安・愛着回避)のうち、愛着不安の高さが文化的世界観、愛着回避の高さが自尊心への希求につながるということが指摘されている(Hart et al., 2005)。

上記の議論に基づき、本発表では4つの死の不安緩衝装置の相対的な用いられやすさについて、オーストラリアの大学生、中年期、老年期の人々を対象にした一連の研究結果を報告する。

方法

参加者 オーストラリアの大学生(18~30歳) 292名(女性231名)、中年期世代(40~60歳) 251

名(女性151名)、老年期世代(65歳以上) 241名(女性112名)を対象とした。

実験計画 実験操作(MS vs. 歯科不安 vs. 統制)の1要因参加者間計画であった。

手続き Web調査により、以下に示す順序で行った。(1)一般他者版愛着スタイル尺度(中尾・加藤, 2004)の英語訳版への回答。(2)実験操作:自由記述式の質問への回答を求めた(e.g., Greenberg et al., 1990)。MS条件では死に関する内容、歯科不安条件では痛みを伴う歯科治療に関する内容、統制条件では休日のライフスタイルに関する内容であった。(3)遅延課題(e.g., Greenberg et al., 1994)として、気分測定(Lambert et al., 2014)とワードサーチパズル(e.g., Arndt et al., 2002)を行った。(4)反応の選択課題:文章作成を求め、その際に文化的世界観、自尊心、親密な関係性、世代継承に関するトピックから、今最も書きたいと思うものを1つ選ぶように教示した。

結果と考察

多項ロジスティック回帰分析を行った。目的変数は選択したトピック、説明変数はMS(0=統制, 1=MS)、歯科不安(0=統制, 1=歯科不安)愛着不安、愛着回避、これらの交互作用とし、世代ごとに分析を行った。主な結果を記すと、大学生においては愛着不安が高い場合に、MS操作によって世代継承への求めやすさが下がる傾向が見られた。中年期世代においては愛着スタイルにかかわらず、MS操作操作で自尊心よりも世代継承を求める比率の上昇が有意傾向で認められた。また老年期世代では、愛着スタイルによりMS操作の自尊心、親密な関係性、世代継承の求めやすさへの影響が異なる傾向が示された。より詳細な結果については、ポスターに記載している。各世代で異なる結果が得られたことから、年齢世代により相対的な死の不安緩衝装置の重要度が異なることが考えられる。

謝辞

本研究の大学生データの取得にご協力してくださいました、ラ・トローブ大学の嘉志摩江身子先生に、心より感謝申し上げます。